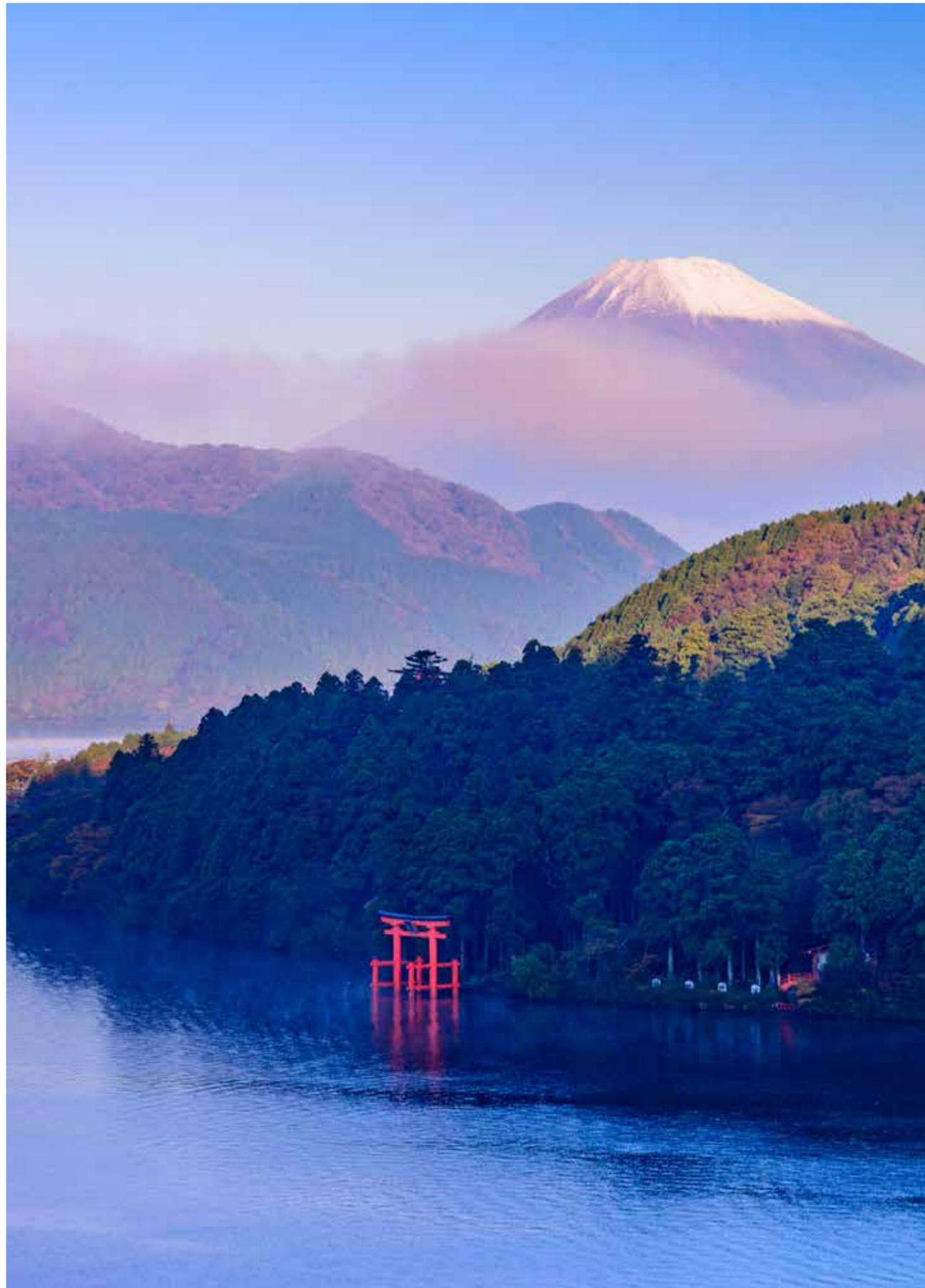


温故知新

— 先賢の実績に学ぶ —



箱根芦ノ湖（神奈川）

時は徳川時代末期。

備中松山藩に山田方谷（1805 - 1877）という人物が生を享けました。方谷は幼少時代から神童の誉高く、没落していた山田家を再興し、藩主板倉勝静の命に従い破綻寸前にあった藩をたった7年（1849 - 1856）で見事に再建し、歴史的な偉業を成し遂げた人物です。

当時松山藩は表向き5万石とは言いながら実質1万5千石の石高でしかなく、10万両（現在の価値でいうと600億円）の負債を抱え、人心も疲弊して困窮のどん底にありました。

方谷の改革の骨子は、

1. 産業振興：地元の産品を用いて新たな産業を興し外貨獲得（米経済から貨幣経済へ）
2. 負債整理：緻密な返済計画策定と実行、大坂蔵屋敷廃止等
3. 藩札刷新：信用のなくなった旧藩札を焼却し、銀と兌換出来る新札発行
4. 上下節約：藩士の禄高の減額、役人への饗応禁止等
5. 民政刷新改革：賄賂を戒め、賭博禁止、目安箱設置等
6. 教育改革：領民の為の学問所（寺子屋、家塾）を設立し民度の向上を行う
7. 軍制改革：農兵を組織化し、近代的な銃陣、新式砲術の採用

といったもので、当初、貧乏板倉と揶揄されていた藩を7年後には負債を完済し、逆に10万両の資金を貯え、全国に知られる優良な藩として蘇らせました。

翻って今日の日本の状況は、改革前の松山藩と酷似しています。

今日、日本の国と地方の借金は約1100兆円を超え、日本のGDPの約2倍以上となっています。

加えてかつて多くの日本人が持っていた勤勉の気質や道徳の観念が失われつつあり、それと並行して、かつての技術立国の強さが弱体化して、海外から稼ぐ力が劣化してきているのは、国際的比較でみても顕著になりつつあります。

こうした背景にはこれまでの国家戦略の間違いがその根本に有る様に思います。

今日の為政者、行政、そして経営者は山田方谷、そして二宮尊徳といった歴史上、藩及び国家的改革を成し遂げた先賢から学び直して、生かすべきだと思います。

私は特定の政党を支持してはませんが、先の安倍政権は奇しくも7年8ヶ月の長期政権であった事を考えると、山田方谷改革の7年と比較し、失われた7年と思えてなりません。

急速に暴走の度が強くなってきている某覇権国家の強大化を考えると、日本が再びその国力を取り戻して、世界の平和と安全に寄与してゆく必要性を強く感じます。

今こそ、先賢の実績を学ぶ「温故知新」の精神で、大胆な構造改革を実践してゆかねばと切に思う次第です。

徳真会グループ
代表 松村 博史